多賀城市文化財調査報告書第47集

八幡沖遺跡

—第3次調査報告書—

平成9年12月

多賀城市教育委員会

正　誤　表

頁	行	誤	正
8	15	側柱	入側柱
8	17	約1.0m、約0.9m、約1.2m	約1.0m、約0.9m、約1.2m、約0.8m
図版　4			縮尺1：1
図版　5			縮尺1：1
報告書抄録		発行年月日 西暦1997年12月31日	発行年月日 西暦1997年12月19日

目　　次

例　言
目　次
Ⅰ　遺跡の位置と地理的・歴史的環境……2
Ⅱ　調査方法と経過……4
Ⅲ　調査成果……6
　　1．層序　2．発見遺構　3．出土遺物……6
Ⅳ　遺構の性格と年代……12
Ⅴ　まとめ……13
付章　資料紹介―八幡沖遺跡隣接地採集の土師器甕……14

例　　言

1．本書は、大蔵省所有地の開発計画に伴う八幡沖遺跡第３次調査の成果をまとめたものである。
2．遺構の名称は第１次調査からの一連番号である。
3．本書中の遺構の分類記号は次のとおりである。
　　ＳＢ：建物　ＳＤ：溝　ＳＫ：土壙
4．本書挿図中の数値は標高値を示している。
5．調査区の実測基準線は「平面直角座標系Ｘ」を使用して設定した。
6．方位の表示は座標北を示している。
7．土色は『新版標準土色帖』（小山・竹原：1973）を参照した。
8．本書は、調査員の千葉孝弥、山川純一、三浦幸子が協議して作成した。執筆分担はⅠ～Ⅴが千葉、付章が山川である。編集は千葉が行った。また、遺物整理および図版作成に際し、熊谷純子、坂本英美の協力を得た。
9．調査に関する諸記録および出土遺物はすべて多賀城市教育委員会が保管している。

調査要項

遺跡名　八幡沖遺跡　やわたおきいせき　（宮城県遺跡登載番号18007）
所在地　宮城県多賀城市宮内一丁目152―１
調査面積　433㎡（対象面積　1444.25㎡）
調査期間　平成９年８月25日～平成９年９月12日
調査主体　多賀城市教育委員会　教育長　櫻井茂男
調査担当　多賀城市埋蔵文化財調査センター　所　長　木村忠雄
調査員　千葉孝弥　武田健市　山川純一　三浦幸子　車田　敦

Ⅰ　遺跡の位置と地理的・歴史的環境

(1)　位置と現況

多賀城市は、仙台市の中心部から北東約10kmの位置にあり、北で利府町、東で塩竈市・七ケ浜町、南と西で仙台市と接している（第１図）。本遺跡は、市の南端部に位置しており、八幡神社境内およびその南側の地域を範囲としている。規模は南北約220m、東西約120mである。周辺一帯は仙台港の開削、工場・住宅用地の造成などによって、旧地形が大きく改変され、わずかに遺跡周辺が空閑地として残っているのみである。現地形はおおむね平坦であるが八幡神社境内が若干高く、その南端部には参道に面して土塁状の高まりが東西約180mにわたって認められる。この高まりは、最も良好な部分で幅約4.5m、高さ約1.5mである。

第１図　多賀城市の位置

(2)　地理的環境

本遺跡は海岸線まで約2.5kmの平坦部に立地している。この一帯は、地理的には宮城野海岸平野と呼ばれる沖積低地の北東部にあたり、海岸線に沿って多数の浜堤が発達している。[(1)] 本遺跡が立地しているのは南北3.3km、東西1.1kmと大規模な浜堤である。

(3)　歴史的環境

本遺跡周辺においてはいくつかの遺跡が知られている（第2図）。南西約400mの位置にある沼向遺跡（仙台市）では古墳時代前期の方形周溝墓・竪穴住居、後期の円墳などが発見されており、海岸部における希少な調査例として注目されている。埋蔵文化財包蔵地としては登録されていないが、本遺跡西側の県道付近からも古墳時代後期の土器が発見されている（付章参照）。奈良・平安時代の遺跡としては東約600mの地点に東原遺跡があり、古代の遺物包含地とされている。中世の遺跡としては沼向遺跡の北側に位置する遠藤館跡が知られている。また、本遺跡北側の八幡神社は、八幡氏が末の松山周辺に居館を構えたおりに当地に移されたものと伝えられている。

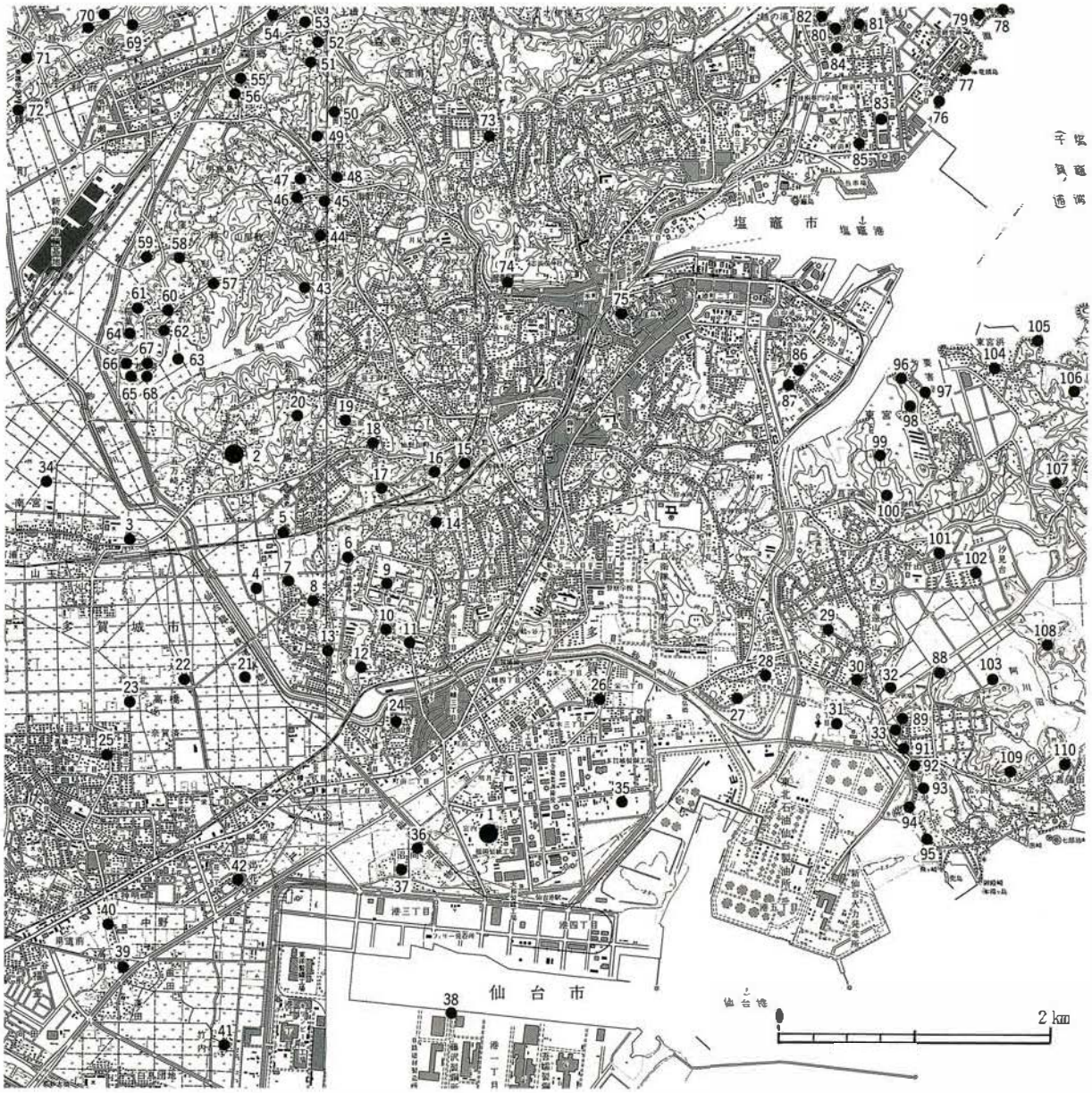
なお、本遺跡の東側には「方八丁（ほうはっちょう）」という字名が残っている。これは古代の遺跡に深く関わる地名として歴史地理学の立場からの研究があることも付記しておきたい。[(2)]

(4)　本遺跡におけるこれまでの調査成果

本遺跡は、昭和47年頃の分布調査において土器や瓦が採集され、宮城県遺跡地図には古代の集落跡として記載されている。本遺跡の発掘調査はこれまで２回実施されている（第３図）。第１次調査（昭和62年度）は八幡神社の南側を対象として実施したものである。東西方向のトレンチを３箇所に設定したところ、南北溝１条と北側のトレンチにおいて小ピットなどを発見している。南北溝からは赤焼き土器高台杯などが

(1)　松本秀明「仙台平野の沖積層と後氷期における海岸線の変化」『地理学評論』第54巻第２号1981に収録されている「仙台平野の微地形分布（北部）」を参考とした。このほか、石井武政・柳沢幸夫・山口昇一『地域地質研究報告塩竈地域の地質』地質研究所1993を参照。

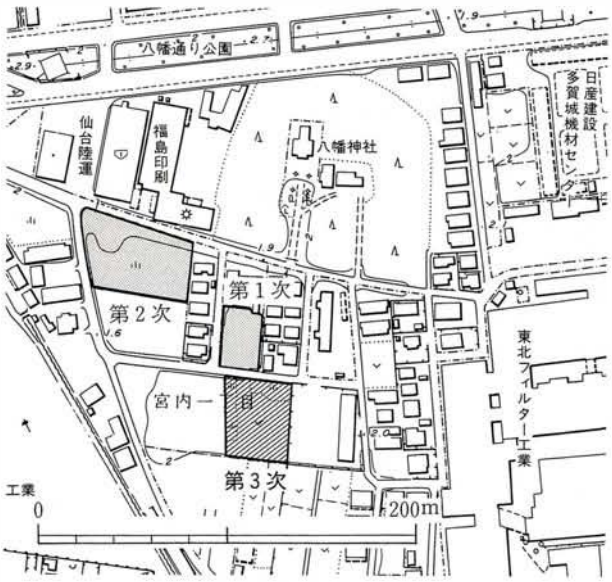
(2)　木下　良「律令時代における辺境村落の一類型―陸奥国の『方八丁』について―」『人文地理』23―１　1971
この中で、「方八丁」は古代陸奥国において計画的に建設された集落であることや、条里的方格地割りの施工を目指したことなどが述べられている。本遺跡東側の「方八丁」もその一例として取り上げられているが実態は不明である。



	多賀城市	23	大日南遺跡	44	十三本塚遺跡	67	松崎B遺跡		**七ケ浜町**		
1	八幡沖遺跡	24	八幡館遺跡	45	十三塚遺跡	68	松崎C遺跡	88	林崎貝塚		
2	多賀城跡	25	発向遺跡	46	洞女喜遺跡	69	利府城跡	89	桝形囲横穴古墳群		
3	山王遺跡	26	桜木遺跡	47	天神台遺跡	70	館ケ沢A・B遺跡	91	砂山横穴古墳群		
4	市川橋遺跡	27	西原遺跡	48	山崎敷遺跡	71	熊野宝遺跡	92	薬師横穴古墳群		
5	館前遺跡	28	元舟渕遺跡	49	郷楽遺跡	72	八幡崎B遺跡	93	弁天A遺跡		
6	多賀城廃寺	29	伯木遺跡	50	郷楽東遺跡		**塩釜市**	94	弁天B遺跡		
7	丸山囲古墳群	30	大代横穴古墳群	51	山中遺跡	73	滑水沢横穴古墳	95	弁天C遺跡		
8	高崎遺跡	31	大代遺跡	52	川袋古墳群	74	塩釜神社境内遺跡	96	左道貝塚		
9	御屋敷遺跡	32	橋本囲貝塚・橋本囲横穴古墳群	53	川袋遺跡	75	塩釜古館跡	97	小畑貝塚		
10	稲荷殿古墳	33	桝形囲貝塚	54	石田遺跡	76	新浜A遺跡	98	左道遺跡		
11	桜井館跡	34	内館館跡	55	関根遺跡	77	新浜B遺跡	99	国史跡大木囲貝塚		
12	志引遺跡	35	東原遺跡	56	窪沼遺跡	78	内裏島A遺跡	100	大木城跡		
13	東田中窪前遺跡		**仙台市**	57	窪遺跡	79	内裏島C遺跡	101	野山遺跡		
14	留ケ谷遺跡	36	遠藤館跡	58	天形遺跡	80	杉の入裏A貝塚	102	野山貝塚(鬼ノ神山)		
15	矢作ケ館跡	37	沼向遺跡	59	北窪遺跡	81	杉の入裏B貝塚	103	阿川沼貝塚		
16	野田遺跡	38	大町畳敷跡	60	台城遺跡	82	越の浦B貝塚	104	東宮貝塚(鳳寿寺貝塚)		
17	小沢原遺跡	39	高柳A遺跡	61	台城B遺跡	83	袰杉ノ入貝塚	105	丑山遺跡		
18	馬原遺跡	40	高柳B遺跡	62	台城C遺跡	84	袰杉ノ入貝塚	106	小友遺跡		
19	法性院遺跡	41	竹ノ内遺跡	63	加瀬沼遺跡群	85	崎山囲洞窟遺跡	107	丑谷辺遺跡		
20	西沢遺跡	42	出花遺跡	64	稲荷崎遺跡	86	一本松貝塚	108	鬼の神山横穴古墳群		
21	六貫田遺跡		**利府町**	65	松崎A遺跡	87	一本松横穴古墳群	109	笹山貝塚		
22	大日北遺跡	43	加瀬貝塚	66	稲荷崎B遺跡			110	諏訪神社前遺跡		

第2図　遺跡分布図

多数出土しているが、遺構に伴わないと見ている。[3] 第２次調査（平成３年度）は八幡神社の南西部を対象として実施した。南北方向のトレンチを３箇所設定したところ、西側の第１トレンチでは近・現代の溝を１条発見したのみであるが、東側の第３トレンチでは掘立柱建物跡や多数の小ピット、溝跡などを発見した。掘立柱建物跡は南北に並ぶ２つの柱穴を発見したのみであり詳細は不明であるが、柱穴は掘り方が径0.8～1.0m、柱痕跡が径17～20cmであり、多賀城周辺遺跡の中では比較的規模が大きいと言える。柱穴は中央の第２トレンチにおいても１つ検出しており、数棟の建物の存在が想定される。それらの年代については建物跡や溝跡から赤焼き土器が出土していることからおおよそ平安時代と考えている。[4]



第３図　調査区位置図

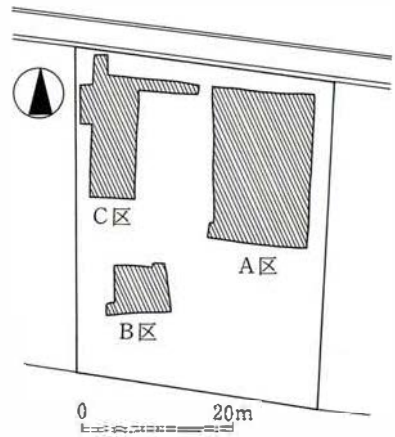
(3)　「II．八幡沖遺跡」多賀城市埋蔵文化財調査センター『年報２　昭和62年度』多賀城市文化財調査報告書第16集　1988
(4)　「１．調査報告　３．八幡沖遺跡試掘調査」多賀城市埋蔵文化財調査センター『年報６平成３年度』多賀城市文化財調査報告書第33集　1993
　同報告の中ではふれていないが、第2トレンチにおいても掘立柱の柱穴がみられることから建物跡の存在を推定した。

II　調査方法と経過

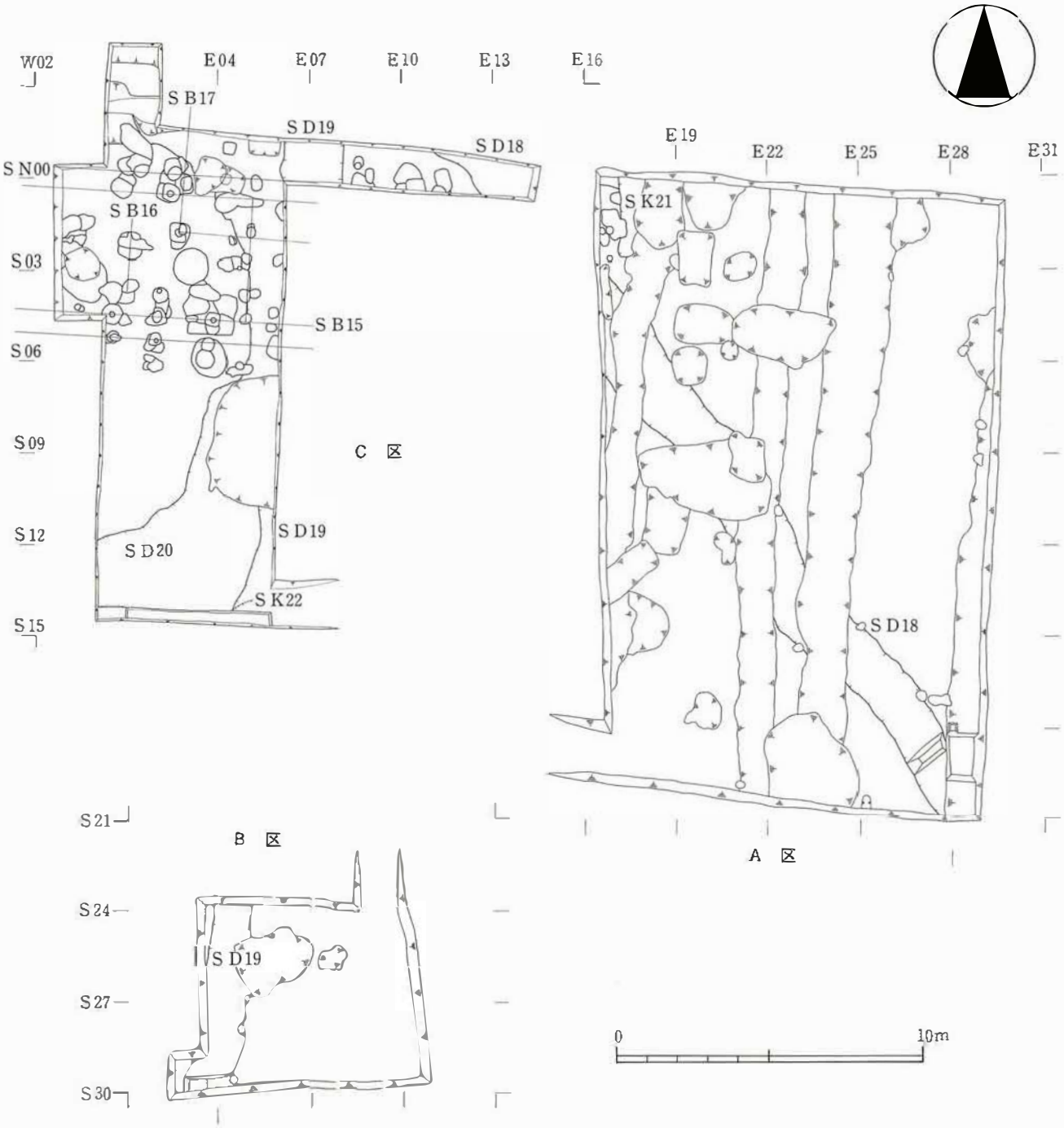
対象地区の北東部、南西部、北西部の３箇所に調査区を設定し、順番にＡ区、Ｂ区、Ｃ区とした（第５図）。今回は確認調査であり、発見した遺構については平面的な調査にとどめ、基本的に埋土を掘り下げていない。しかし、建物跡については柱痕跡の確認のため、溝跡については残存状況の確認のため一部断ち割り調査を実施した。

調査に先立ち、８月22日に調査区を設定し、器材等の準備・点検を行った。調査の主な経過については次のとおりである。

第４図　調査前の状況（北より）



第５図　トレンチ配置図



第６図　遺構全体図

８月25日　調査開始。調査員は千葉と山川の２名。バックホーによりＡ区表土除去。盛土が厚い。

８月26日　Ａ区遺構検出作業。砂層上で近・現代の南北溝を3条発見。南端部の撹乱坑を一部掘り上げ、下層の状況を観察しようとしたが湧水が著しく断念。バックホーによりＢ区表土除去。

８月27日　Ｂ区遺構検出作業。西壁際で南北溝1条発見。バックホーによりＣ区表土除去。古代の溝や柱穴など発見。

８月28日　Ａ区精査開始。Ｂ区西側を一部拡張し、南北溝の幅を確認。Ｃ区で10世紀前葉の火山灰が堆積した溝跡を発見。その上から掘り込まれた後世の穴を掘り上げ、遺構の状況を探る。

８月29日　Ｃ区柱穴群の精査。測量会社に委託し、実測のための原点および水準点を移動。

９月１日　午前中雨。午後Ａ・Ｂ区内を３ｍ方眼に割り付け、遺構実測の準備（～２日）。本日より調査員三浦が参加。

９月３日　Ａ区遺構検出状況写真撮影。1/100の平面図作成（～４日）。東壁際で発見した南北溝とＳＤ18の一部を

断ち割り（南北溝はその後の調査で近世以降のものと判明）。B区遺構検出状況写真撮影。C区で掘立柱建物跡を発見。柱穴群の広がりを見るため2箇所拡張(～5日)。

9月8日　午前中雨。午後A区の遺構のレベル計測。部分的に1/20の平面図作成。B区SD19溝の南端を断ち割り。

9月9日　A区北壁において土層堆積状況を検討。SD18・19溝断面図作成。

9月10日　A区北壁断面図作成。北西隅においてSK21等1/20の平面図作成。A区一部埋め戻し。B区1/100の平面図作成。A区との関係を見るためC区から東側へトレンチをのばす。

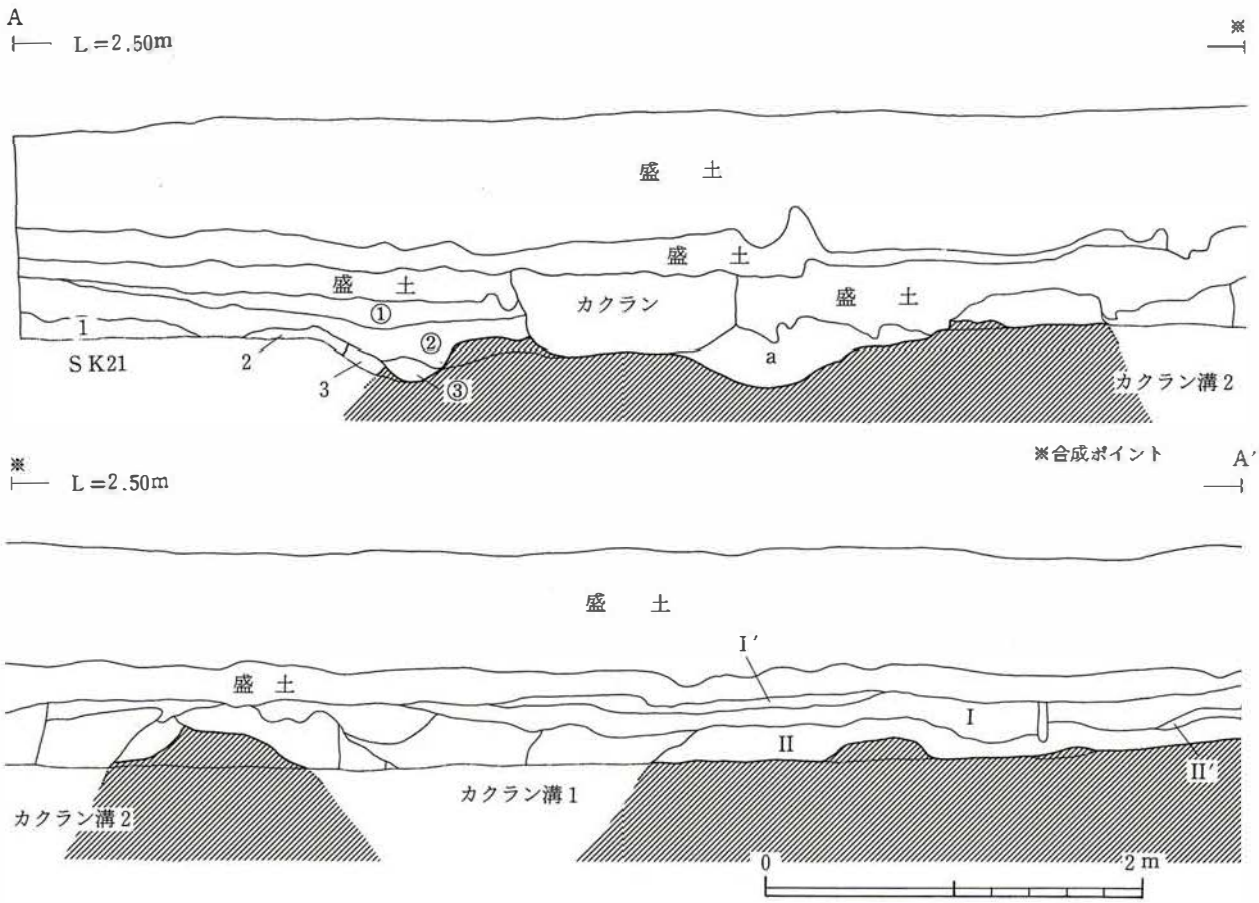
9月11日　B区遺構のレベル計測。C区の3棟の建物の柱穴の組み合わせについて見解がまとまる。遺構実測の準備。

9月12日　C区1/20の平面図作成。SB15・16・17柱穴をそれぞれ1つ断ち割り、断面図作成。遺構検出状況写真撮影。調査区内を埋め戻し、すべての調査終了。

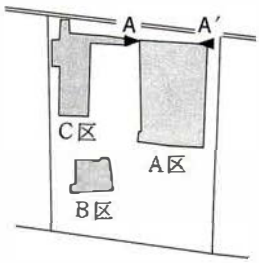
III　調査成果

1.　層序

調査区全体は山砂による厚い盛土整地によって覆われており、現在の地表面から約0.8m下がそれ以前の



No	土色	土性	備考	種別
I	黒褐色10YR2/3	砂質土		表土
II	黒褐色7.5YR3/2	砂質土	地山粒を多く含む	
①	黒褐色2.5Y3/1	砂質土	炭化物を含む	遺構埋土か
②	黒褐色2.5Y3/2	砂質土	炭化物を少量含む	
③	暗灰黄色2.5Y4/2	砂	もろい	
a	暗褐色10YR3/3	細砂	しまりあり	遺構埋土か
1	黒褐色2.5Y3/1	砂質土	炭化物を含む	SK21埋土
2	黒褐色2.5Y3/1	砂質土	炭化物・地山ブロックを含む	
3	黄褐色2.5Y5/3	砂	黒褐色土粒を含む	



第7図　A区土層堆積状況

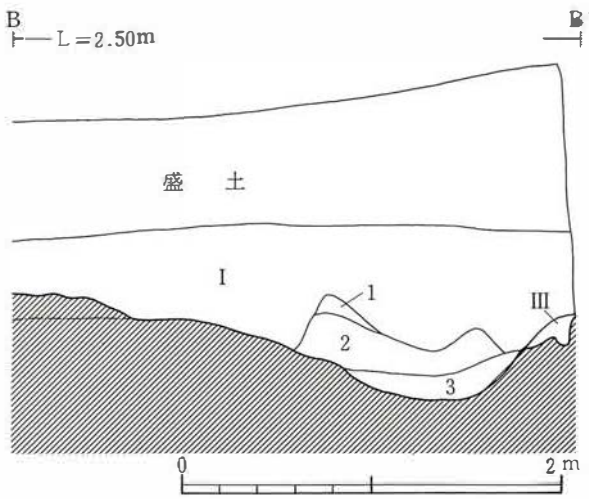
表土となっている（第Ⅰ層）。

Ａ区：第Ⅰ層の下に厚さ約30cm黒褐色砂質土があり（第Ⅱ層）、明治時代以降の磁器茶碗が出土している。この層は畑の耕作土と見られ、底面には凹凸がある。その下は均質で粒子が細かいにぶい黄色の砂層となっている（第Ⅳ層）。

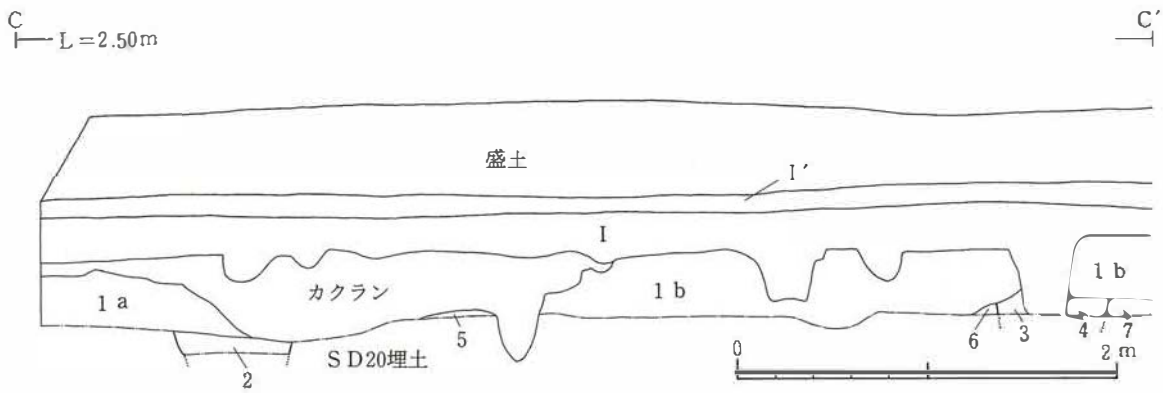
Ｂ区：第Ⅰ層が0.3～0.6mの厚さで堆積しており、その下は直接第Ⅳ層となっている。

Ｃ区：第Ⅰ層が南西部では厚さ0.5m、それ以外では0.2m以下の厚さとなっている。その下には黒褐色の砂層（第Ⅲ層）があるが南壁の断面で確認したのみである。その下は第Ⅳ層となっている。

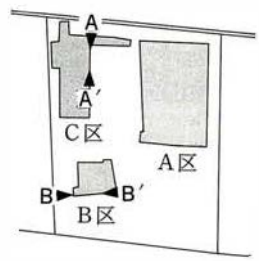
なお、第Ⅳ層は地山と見られ、その上面の標高は約1.1mである。(5)



No	土色	土性	備考	種別
Ⅰ	黒褐色10Y R2/3	砂質土		表土
Ⅲ	黒褐色10Y R2/3	砂質土	褐色土ブロックを含む	
1	黒褐色10Y R2/3	砂	炭化物を少量含む	SD19埋土
2	黒色10Y R2/1	砂	炭化物を少量含む	
3	黒褐色10Y R2/3	砂	やや粘性あり	



No	土色	土性	備考	種別
Ⅰ	黒褐色10Y R2/3	砂質土		表土
1 a	黒褐色10Y R2/3	砂質土	灰白色火山灰小粒を含む	SD19埋土
1 b	暗褐色10Y R3/3	砂質土	灰白色火山灰小粒を含む	
2	暗褐色10Y R3/3	砂質土	暗褐色砂ブロックを含む	柱穴埋土
3	黒褐色7.5Y R3/2	粘質土	灰白色火山灰ブロックを含む	柱穴埋土
4	黒褐色7.5Y R3/2	粘質土	灰白色火山灰ブロックを含む	
5	黒褐色10Y R2/3	粘質土		SD20埋土
6	黒褐色10Y R2/3	粘質土		
7	黒褐色10Y R2/3	粘質土		



第８図　Ｂ・Ｃ区土層堆積状況

(5) 第Ⅳ層は無遺物層と見ているが、Ｃ区において第Ⅳ層から土師器の細片が1点出土している。詳細は不明であるが旧河川などの存在を確認できなかった可能性もある。

2. 発見遺構

掘立柱建物3棟、溝跡3条、土壙2基を発見した。建物跡については、組み合わせが明らかでない柱穴を多数発見していることから、さらに多くのものが存在したと推定される。

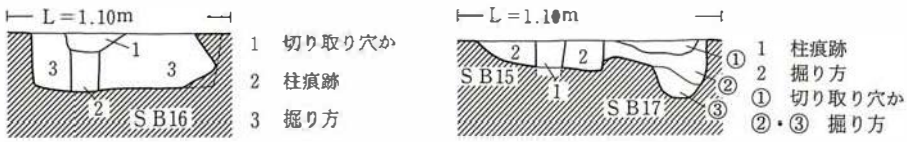
(1) 掘立柱建物跡

【ＳＢ15】

Ｃ区北半部の第Ⅳ層上で発見した東西棟掘立柱建物である。桁行3間分確認したのみであり、東・西両側とも調査区外にのびている。北側と南側には庇がある。ＳＢ16･17建物跡、ＳＤ20溝跡と重複しており、ＳＢ17とＳＤ20よりは新しい。ＳＢ16とは直接柱穴が重複していないため新旧関係は不明である。本建物跡の方向は、柱痕跡を確認している南入側柱列でみると東で3度32分南に偏している。柱間は、北側柱列で西より約1.5m、約1.7m、北入側柱列で西より約1.6m、約1.8mである。南側柱列は西より約1.4m、約1.7m、南入側柱列で西より約1.5m、約1.8mである。一方、梁行きについては約5.5mであり、身舎が約4.0m、北庇が約0.7m、南庇が約0.8mである。柱穴の平面形は方形と円形とがある。規模は、前者が55cm×70cmのものや一辺45cmのものがあり、後者は径50～60cmである。掘り方埋土は暗褐色砂質土であり、焼土や炭化物を含んでいるものが多いのが特徴である。柱痕跡は径15～20cmの円形であり，埋土は黒褐色砂質土で炭化物を含んでいる。なお、身舎で最も東側の柱穴の約1.0m東側で側柱に取り付く5個の小柱穴を発見した。いずれも柱痕跡は検出していないが、それらの方向はおおむね側柱と直交しており、間仕切りの柱穴と考えられる。柱間は、北より約1.0m、約0.9m、約1.2mである。柱穴の平面形は楕円形であり、規模は長径40cm・短径30cmのものや長径50cm・短径40cmのものなどがある。遺物は、掘り方埋土から赤焼き土器杯の小破片が数点出土している。

【ＳＢ16】

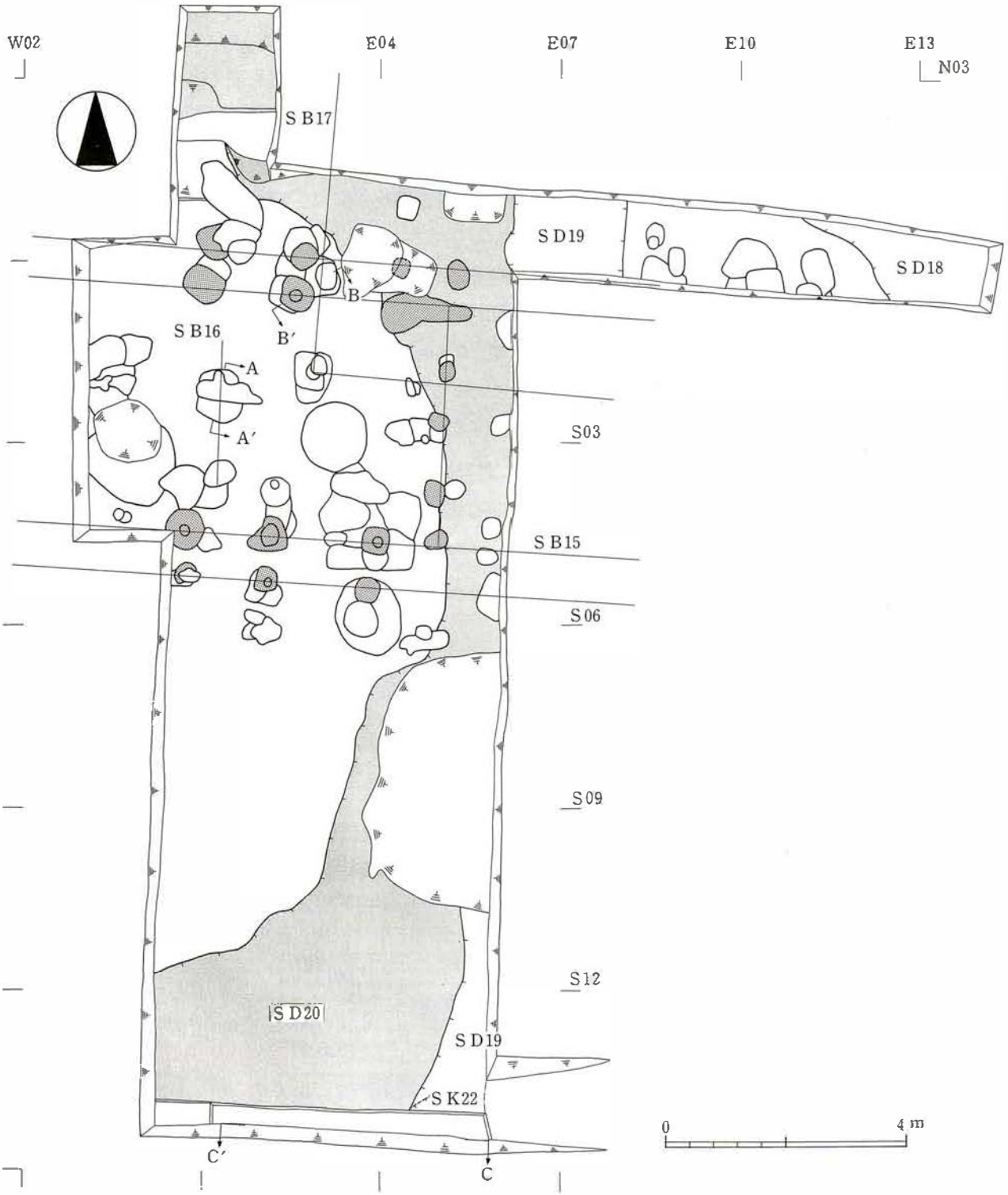
Ｃ区北半部の第Ⅳ層上で発見した掘立柱建物である。南北方向に並ぶ2つの柱穴を確認したのみであるが、いずれも規模の大きな柱穴であることから建物跡と考えたものである。ＳＢ15建物跡と重複しているが新旧関係は不明である。本建物の方向は、北で約6度東に偏している。柱間は約1.7mである。断ち割った北側の柱穴でみると、平面形はおおよそ長方形であり、規模は0.8m×0.9m、深さ0.3mである。壁の状況は、北側は直立しているが、南側は大きく抉れている。掘り方埋土はにぶい黄色砂と暗褐色砂質土であり、凹凸が著しい。柱痕跡は径15cmの円形であり、埋土は暗褐色砂質土である。遺物は、掘り方埋土から赤焼き土器杯の小破片が数点出土している。



第9図　ＳＢ15・16・17柱穴断面図

【ＳＢ17】

Ｃ区北半部の第Ⅳ層上で発見した掘立柱建物である。南北方向に並ぶ2つの柱穴を確認したのみであり、さらにその南側にはのびないことが明らかであることから、これらを北側および東側にのびる建物跡の南西隅と考えておきたい。ＳＢ15建物跡と重複しており、それより古い。本建物の方向は、北で約6度東に偏している。柱間は約1.7mである。柱穴の平面形は長方形であり、規模は北側の柱穴が50cm×65cmであり、



第10図　C区遺構全体図

南側のものは60cm×70cmである。断ち割った北側の柱穴でみると、深さは40cmであり、北側は壁が直立するが、南側は斜めに掘り込まれている。掘り方埋土は、上層は暗褐色土を含むにぶい黄色砂、下層は暗褐色砂質土である。柱痕跡は径27cmの円形である。遺物は出土していない。

⑵ 溝　跡

【ＳＤ20】

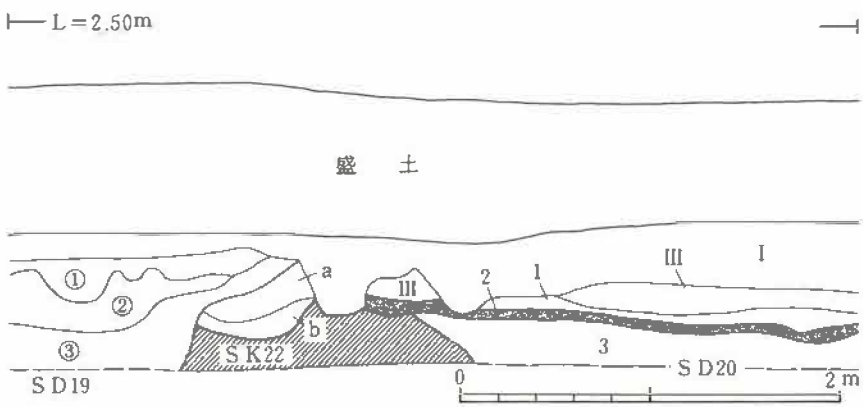
Ｃ区の第Ⅳ層上で発見した溝跡である。調査区北西隅から南西隅にかけて弧を描くように湾曲してのびている。ＳＢ15建物跡、ＳＤ19溝跡と重複しており、それらより古い。南端部を断ち割り調査したところ、壁は緩やかに立ち上がっており、規模は幅約4.0m、深さ0.4m以上である。埋土は、上層に灰白色火山灰が５～８cmの厚さで自然堆積しており、その下層は均質な黒褐色砂となっている。遺物は、１層から赤焼き土器高台杯・皿が数点出土している。

【ＳＤ19】

Ｂ区からＣ区にかけて発見した南北溝跡である。第Ⅲ層上面から掘り込んでいる。ＳＤ20、ＳＫ22と重複しており、それらより新しい。規模は、幅2.0m、深さ0.6m以上である。埋土は黒褐色砂質土を主体としている。遺物は出土していない。

【ＳＤ18】

Ａ区とＣ区において発見した溝跡である。第Ⅳ層上面で検出した。Ａ区南東隅からＣ区東端部にかけて約28m検出した。Ａ区南端部を断ち割り調査したところ、壁は緩やかに立ち上がっており、東側に段がついている。規模は、幅1.6～2.1m、深さ約40cmである。埋土は黒褐色砂質土がレンズ状に堆積しており、自然に埋没したような状況である。遺物は出土していない。



No.	土色	土性	備考	種別
1	黒褐色10YR2/3	砂質土		表土
Ⅲ	黒褐色7.5YR2/2	砂		
①	黒褐色10YR2/3	砂質土	やや粘性あり。炭化物を含む	ＳＤ19埋土
②	黒褐色10YR2/2	砂質土	やや粘性あり	
③	黒褐色10YR3/2	砂質土	やや粘性あり	
a	黒褐色10YR3/2	砂		ＳＫ22埋土
b	暗褐色10YR3/4	砂		
1	黒褐色10YR2/2	粘質土	砂を含む。灰白色火山灰粒を含む	ＳＤ20埋土
2	黒褐色10YR3/2	砂	中央は灰白色火山灰自然堆積層	
3	黒褐色10YR3/2	細砂	均質	

第11図　ＳＤ19・20、ＳＫ22断面図

3.　出土遺物

古代の土師器、須恵器、赤焼き土器[6]、中世の無釉陶器、近世以降の陶磁器が出土している。以下、古代・中世の資料について概要を説明する。

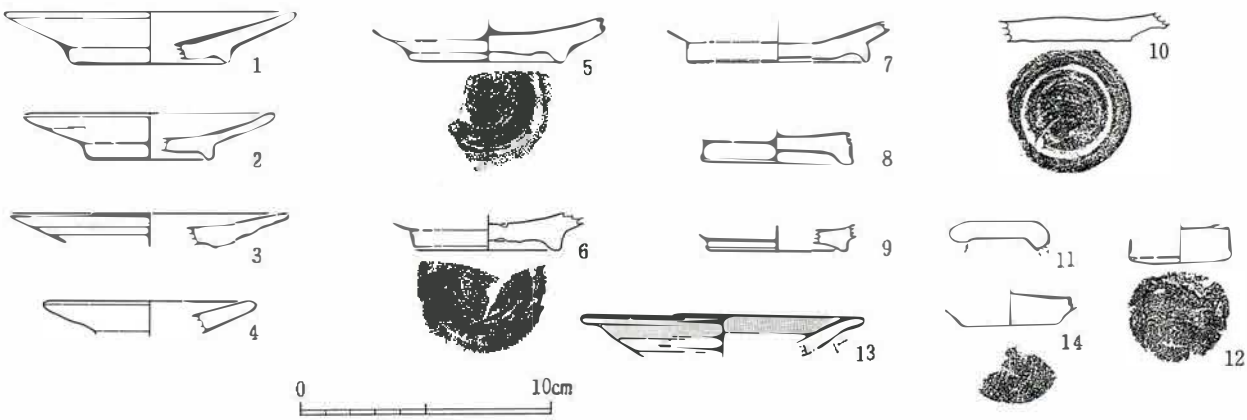
古代の遺物としては土師器甕、須恵器甕、赤焼き土器杯・高台杯・高台皿が出土している。いずれも小破片であり、形態的特徴など不明な資料がほとんどである。それらの割合をみると、土師器杯0.6%・甕８%、須恵器瓶0.6%・甕1.2%、赤焼き土器杯等89.0%、その他0.6%であり、赤焼き土器杯等が圧倒的に多

く出土している。年代的にはほとんどが平安時代である。奈良時代以前と見られるものは、非ロクロ調整で、体部外面をハケメ調整した土師器甕がわずかに１点出土しているのみである。それらのうち、形態的な特徴を多くとどめている赤焼き土器杯・高台杯・高台皿など13点を図示した(第12図)。１～４は高台皿、５～10は高台皿或いは高台杯である。11は底径が小さく、高台皿の可能性が高い。12は高台を厚く造り出したいわゆる擬似高台である。

	土師器杯	土師器甕	須恵器甕	須恵器瓶	赤焼き土器杯・皿等	その他	合計
A区	0	6	2	1	18	0	27
B区	0	0	0	0	0	0	0
C区	1	7	0	0	127	1	136
合計	1	13	2	1	145	1	163

表１　出土土器地区別出土点数(古代のみ)

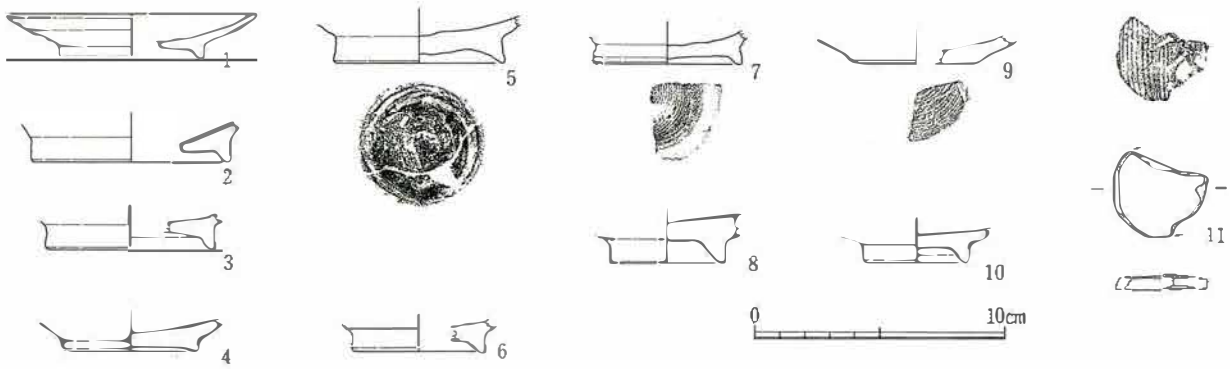
中世の遺物としては無釉陶器甕が出土している。体部破片が11点（内６点が接合）であり、すべてＡ区から出土している。胎土や色調から３個体と推定される。１点は体部最大径が約36cmの甕である。粘土紐巻き上げ成形であり、体部外面は縦方向にハケメ調整の後、肩から上をヘラナデ調整している。



番号	種類	遺構・地区	層位	特徴	口径	底径	器高	登録番号
1	赤焼き土器高台皿	Ａ区 攪乱溝		【外面】体部：ロクロナデ、 底部：高台貼付・ロクロナデ 【内面】ロクロナデ（凹凸なし）	(11.6) 残1/24	(6.5) 残6/24	2.1	R—10
2	赤焼き土器高台皿	Ｃ区 Ｄ—１	１層	【外面】体部：ロクロナデ（緩い凹凸あり）、粘土紐巻き上げ痕、 底部：高台貼付・ロクロナデ 【内面】ロクロナデ（凹凸なし）	(10.0) 残4/24	(5.1) 残10/24	1.9	R—９
3	赤焼き土器高台皿	Ｃ区 攪乱		【外面】体部：ロクロナデ(凹凸あり)、粘土紐巻き上げ痕、 底部：高台貼付・ロクロナデ 【内面】ロクロナデ（緩い凹凸あり）	(11.1) 残3/24			R—11
4	赤焼き土器高台皿	Ｃ区 攪乱		【外面】ロクロナデ 【内面】ロクロナデ（緩い凹凸あり）	(8.4) 残3/24			R—29
5	赤焼き土器高台杯・皿	Ｃ区	第Ⅰ層	【外面】体部：ロクロナデ(凹凸あり)、 底部：糸切り？→高台貼付・ロクロナデ 【内面】ロクロナデ（緩い凹凸あり）		(7.3) 残6/24		R—８
6	赤焼き土器高台杯・皿	Ｃ区 Ｄ—１	１層	【外面】体部：ロクロナデ、 底部：糸切り→高台貼付・ロクロナデ 【内面】ロクロナデ（緩い凹凸あり）		(5.8) 残15/24		R—６
7	赤焼き土器高台杯・皿	Ａ区 攪乱溝		【外面】体部：ロクロナデ、 底部：糸切り？→高台貼付・ロクロナデ 【内面】ロクロナデ（凹凸なし）		(7.3) 残6/24		R—５
8	赤焼き土器高台杯・皿	Ｃ区 Ｄ—１		【外面】底部：糸切り→高台貼付・ロクロナデ 【内面】ロクロナデ——定方向のナデ		(6.0) 残5/24		R—14
9	赤焼き土器高台杯・皿	Ｃ区	第Ⅰ層	【外面】底部→ロクロナデ 【内面】ロクロナデ		(5.6) 残3/24		R—28
10	赤焼き土器高台杯・皿	Ｃ区 Ｄ—１	１層	【外面】底部：糸切り→高台貼付・ロクロナデ 【内面】ロクロナデ（底部盛り上がる）→一定方向の軽いナデ		4.9 残19/24		R—24
11	赤焼き土器高台皿	Ａ区 攪乱溝		【外面】底部：高台貼付後ヨコナデ(粗雑) 【内面】		(4.1) 残2/24		R—13
12	赤焼き土器高台皿	Ｃ区 攪乱		【外面】ロクロナデ、底部：糸切り 【内面】ロクロナデ？		4.0 残：18/24		R—12
13	施釉陶器皿	Ａ区 攪乱溝		【外面】体部：回転ヘラケズリ ◎　口縁部に長石釉	(11.3) 残3/24			R—19
14	かわらけ	八幡神社境内	表採	【外面】底部：静止糸切り 【内面】ロクロナデ？（凹凸なし）		(3.8) 残8/24		R—30

第12図　出土遺物

(6)　ここで赤焼き土器としているものは、宮城県多賀城跡調査研究所が須恵系土器とよんでいるものと同一のものである。ロクロ調整の後、内外両面とも再調整を行わず、酸化炎焼成された土器のことで、器種は杯・皿・鉢類に一部の甕を含むものである。



番号	種類	遺構・地区	層位	特徴	口径	底径	器高	登録番号
1	赤焼き土器高台皿	No.3 T SD01	2層	【外面】体部：ロクロナデ(凹凸あり)、 底部：高台貼付・ロクロナデ 【内面】ロクロナデ（凹凸なし）	(10.0) 残2/24	(5.8) 残4/24	1.8	R－2
2	赤焼き土器高台杯・皿	No.2 T	第II層	【外面】底部：高台貼付・ロクロナデ 【内面】ロクロナデ（凹凸なし）		(8.0) 残 7/24		R－13
3	赤焼き土器高台杯・皿	No.3 T	第1層	【外面】底部：高台貼付・ロクロナデ （仕上げ丁寧） 【内面】ロクロナデ（凹凸なし）		(6.8) 残6/24		R－10
4	赤焼き土器高台杯・皿	No.2 T SD01	1層	【外面】底部：高台貼付・ロクロナデ 【内面】ロクロナデ（底面に緩い凹凸あり）		(5.4) 残11/24		R－4
5	赤焼き土器高台杯・皿	No.2 T SD01	1層	【外面】底部：手持ちヘラケズリ→高台貼付・ロクロナデ 【内面】ロクロナデ（底面に小突起あり）		(6.8) 残24/24		R－1
6	赤焼き土器高台杯・皿	No.3 T	第1層	【外面】底部：糸切り→高台貼付・ロクロナデ 【内面】ロクロナデ（凹凸なし）		(5.4) 残8/24		R－11
7	赤焼き土器高台杯・皿	No.3 T SD01	2層	【外面】体部：ロクロナデ、 底部：糸切り→高台貼付・ロクロナデ 【内面】ロクロナデ（緩い凹凸あり）		(6.0) 残6/24		R－6
8	赤焼き土器高台杯・皿	No.3 T	第1層	【外面】底部：高台貼付・ロクロナデ （調整粗雑） 【内面】底面にかすかな窪みあり		(4.7) 残24/24		R－9
9	赤焼き土器杯	No.2 T	第II層	【外面】体部：ロクロナデ、底部：糸切り 【内面】ロクロナデ（緩い凹凸あり）		(5.0) 残5/24		R－12
10	赤焼き土器高台杯・皿	No.3 T SD01	2層	【外面】底部：高台貼付・ロクロナデ 【内面】ロクロナデ（凹凸なし）		(4.2) 残4/24		R－5
11	円盤状土製品	No.2 T	第I層	土師器甕（外面ハケメ）の体部破片を利用				R－8

第13図　第1次調査出土遺物

IV　遺構の年代と性格

以上の成果をふまえ、遺構の年代と性格、出土遺物についてまとめておきたい。

はじめに、遺構の年代について検討する。今回発見した遺構のうち、SD20は上層に自然堆積している灰白色火山灰が手がかりとなる。同火山灰は10世紀前葉に降下したとされているものであることからSD20はそれ以前に機能していたものと考えられ、[7]それより新しいSB15の年代は10世紀前葉以降とすることができる。また、SB15・16は柱穴掘り方埋土から赤焼き土器が出土している。赤焼き土器は多賀城周辺においては灰白色火山灰降下直前頃すなわち10世紀前葉に出現するとされている[8]ことから、両建物跡の年代は10世紀前葉以降である。このようにSB15・16はいずれも10世紀前葉を上限としている。SB17についても、他の2棟と方向がおおむね一致していること、位置的にまとまりが認められることなどから年代的に近いものであることが考えられる。3棟の建物跡の下限年代を直接示す資料はないが、SB16・17の柱穴は平面形が方形を基調とし、しかもSB16の柱穴は規模が大きいなど古代の建物跡に共通する要素が見られる。また、これらの建物跡の周辺から中世以降の遺物は1点も出土していないことなどから、おおむね古代の範疇で捉えておきたい。

SD19についてはSD20より新しいことから10世紀前葉以降であることは明らかである。また、それらを覆う第III層上面で確認していることから古代以降のものである可能性が高い。SD18については手がか

りが得られなかった。

次に、それらの性格については考えてみたい。本遺跡は、遺構検出面が標高約1.1mであり、山王遺跡の約3.7m、市川橋遺跡の約2.5mと比較した場合かなり の低地に立地していることがわかる。また、海岸線までの距離が約2.5kmであり、古代においても現在とさほど隔たりがないと推定すると極めて海浜に近い地点に位置しているといえる。遺構についてみると、第2次調査検出分も含めて古代の掘立柱建物跡が5棟発見されている。それらは方向的にまとまりが認められ、庇付きで間仕切りのあるＳＢ15の存在などから一般集落を構成するものとは異なるものと考えられる。以上のことから、本遺跡は海に生産基盤を持つ集団の施設あるいは役所などの可能性が考えられよう。また、調査地点は少ないが、遺構は八幡神社に近接した地点に集中しているように見受けられる。

近年、多賀城跡周辺遺跡の調査が多くの成果を挙げ、平安時代には多賀城南面の微高地に都市空間が形成されていたことが明らかになってきた。ところが、同時代の海岸部に位置する遺跡については不明な点が多く、その存在が知られているもの自体極めて少ないという状況である。これは、本市の海岸部が、早い段階に住宅や工場用地となっていることが原因であり、本来は多数の遺跡が存在した可能性がある。その中の一つ新田前遺跡（七ケ浜町）は本遺跡の東側約2.7kmの地点に位置し、本遺跡とは立地条件など共通する遺跡である。[9] ここでは、小範囲の調査ながら木組みの井戸や「奏」の墨書土器など多賀城南面の遺跡と共通する遺構・遺物が発見されており注目される。本遺跡を含め、今後海岸部の遺跡についても注意していく必要があろう。

最後に、出土遺物について簡単にふれておきたい。今回の出土遺物のうち、古代の資料についてみると89.0%が赤焼き土器で占められており、土師器、須恵器は極めて少ない。このような構成は、多賀城跡の土器変遷の中で10世紀中葉以降とされている土器群に類似している。[10] このことは、消極的ではあるが本遺跡の年代の中心がその頃にあることを示唆していると考えられよう。

Ⅴ　ま　と　め

(1)　海岸部において、古代の掘立柱建物跡3棟、溝跡1条、およびそれ以降の溝跡や土壙などを発見した。

(2)　古代の遺構の年代は、ＳＢ15・16・17が10世紀前葉以降、ＳＤ20が10世紀前葉以前である。

(3)　古代の遺構は八幡神社の南西部に多く分布している。

(4)　古代の遺構の性格については、海に関わる集団の施設あるいは役所の可能性がある。

(5)　調査区東半部から中世陶器が数点出土しており、周辺にその頃の遺構の存在も推定される。

(6)　本遺跡は、現在捉えているよりもさらに広い範囲に及んでいる可能性が高い。

---

(7)　この火山灰の降下年代について検討した宮城県多賀城跡調査研究所は、かつて10世紀前半としていたが（白鳥良一「多賀城跡出土土器の変遷」宮城県多賀城跡調査研究所『研究紀要Ⅶ』1980）、近年は10世紀前葉としている（宮城県 多賀城跡調査研究所「Ⅱ．第61次調査」『宮城県多賀城跡調査研究所1991』1992）。

(8)　宮城県 多賀城跡調査研究所『多賀城跡　政庁跡　本文編』1982。近年同研究所では『宮城県多賀城跡調査研究所1991』1992において須恵系土器の出現が9世紀後半までさかのぼるとの見解を示しているが、今回の出土資料は10世紀前葉以降に普遍的に見られる赤褐色を呈する高台杯・皿等であり、9世紀後半としているものとは異なるものである。

(9)　宮城県教育委員会「Ⅳ．昭和49年度一般開発関係遺跡　(2)　新田前遺跡」『宮城県文化財発掘調査略報（昭和48・49年度分）』宮城県文化財調査報告書第40集　1975

(10)　宮城県多賀城跡調査研究所「Ⅱ．第64次調査」『宮城県多賀城跡調査研究所1993』1994

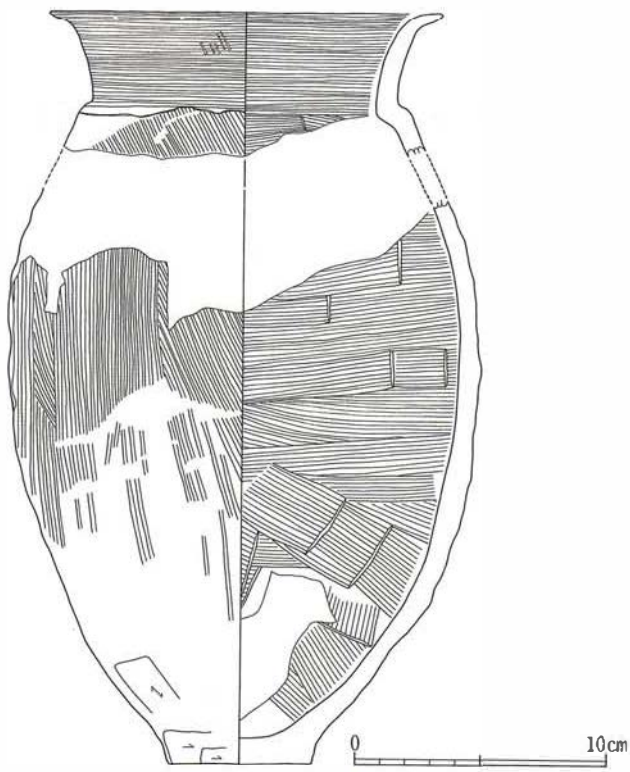
付章　資料紹介八幡沖遺跡隣接地採集の土師器甕

本資料は、八幡沖遺跡第３次調査区の北西約350m、仙台市宮城野区中野字資田の県道塩竈・亘理線脇の用水路掘削（1986年）の際、出土したものである。当時、多賀城市立八幡小学校教諭であった鈴木久夫氏（故人）が採集し、保管していたものを多賀城市埋蔵文化財調査センターが預り、今日に至っている。現在、出土地点は水田となっており、遺物の散布はみられない（第１図）。

土師器甕（第２図）は、いわゆる長胴甕で、口縁部の約1/3、頸部及び胴部・底部の一部を欠くが、全容を窺い知ることができる。推定口径15.6cm、推定底径5.7cm、器高は頸部と体部の接点がないため不明だが約30cmと推定した。頸部は直立気味に立ち上がり口縁部は外反している。頸部と体部の境には明瞭な段があり、底部には木葉痕が残る。器面調整は、外面は口縁部から頸部にかけてはハケメのちヨコナデ、体部はハケメ、底部に近い部分にはヘラケズリがみられる。内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデ、体部はヘラナデが施される。胎土は緻密で、石英粒を少量含む。焼成は良好で、色調は10ＹＲ7/2(にぶい黄橙色)を呈し、体部には黒斑が認められる。年代は、概ね古墳時代後期、氏家和典氏が型式設定した栗囲式の範疇で捉えられる。

八幡沖遺跡では、これまで平安時代およびそれ以降の遺構が発見されているが、古墳時代後期の遺構も存在している可能性がある。

第１図　土器出土地点位置図



第２図　出土遺物

上：調査区航空写真（平成7年撮影）　中央の森が八幡神社。その下の緑地が調査区。
下：同　　上　　（昭和22年撮影）　この空中写真は、米軍が撮影したものを、建設省国土地理院の承認を得て掲載したものである。

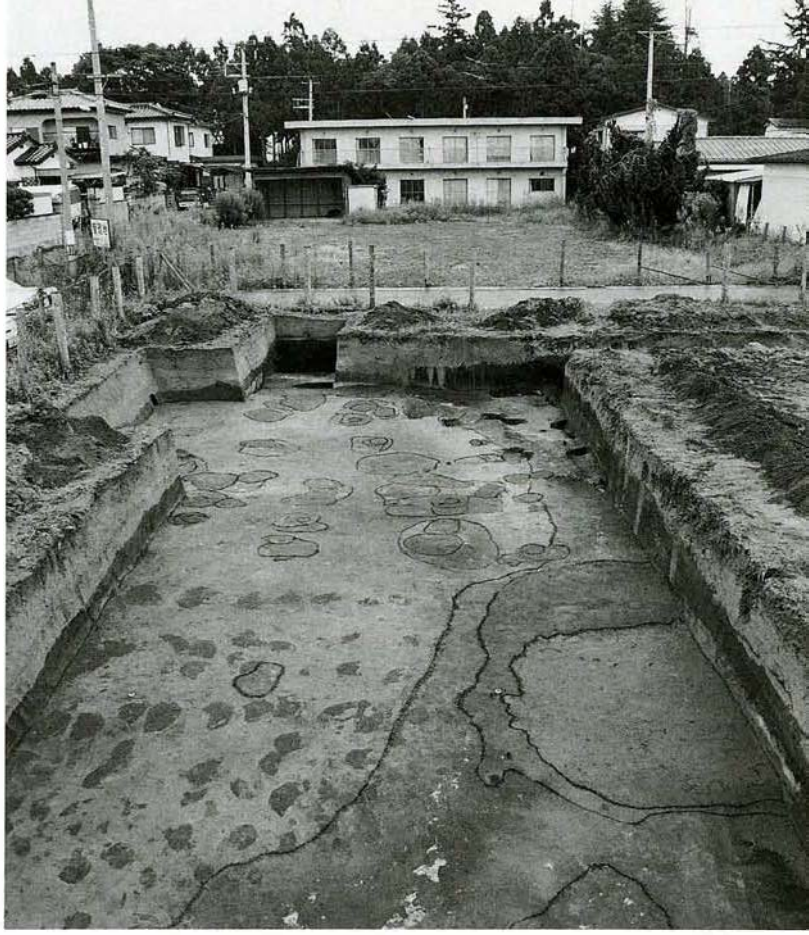
図 版 1

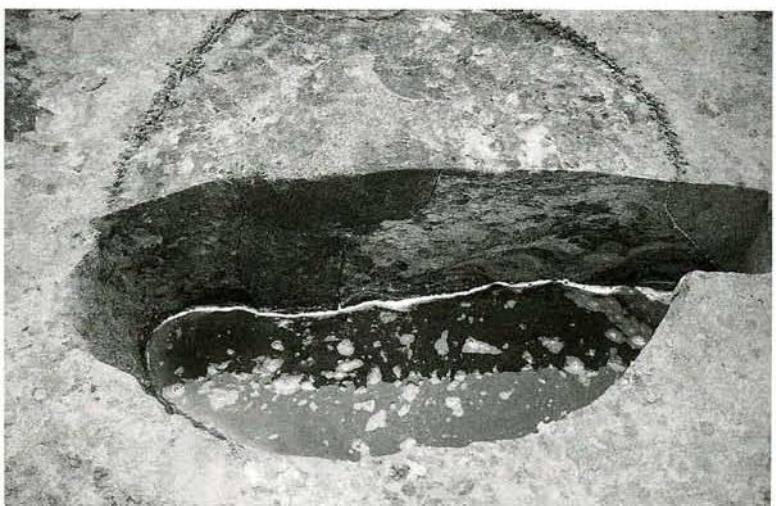
上右：A区全景（南東より）
上左：B区全景（東より）
下　：C区全景（北より）

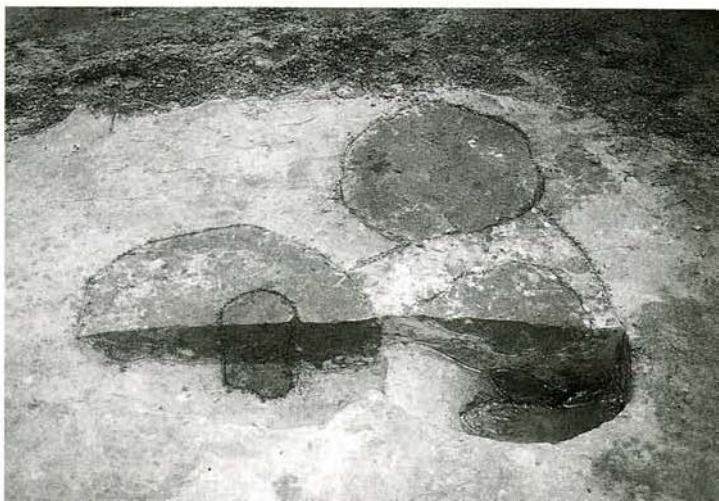
図 版 2

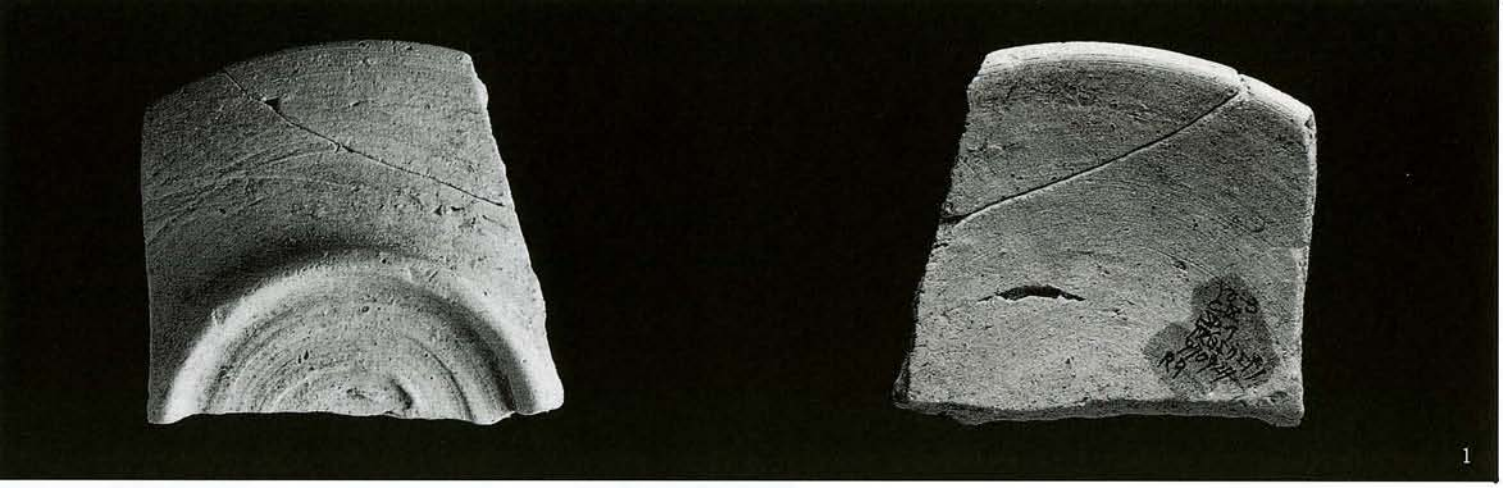
図　版　3

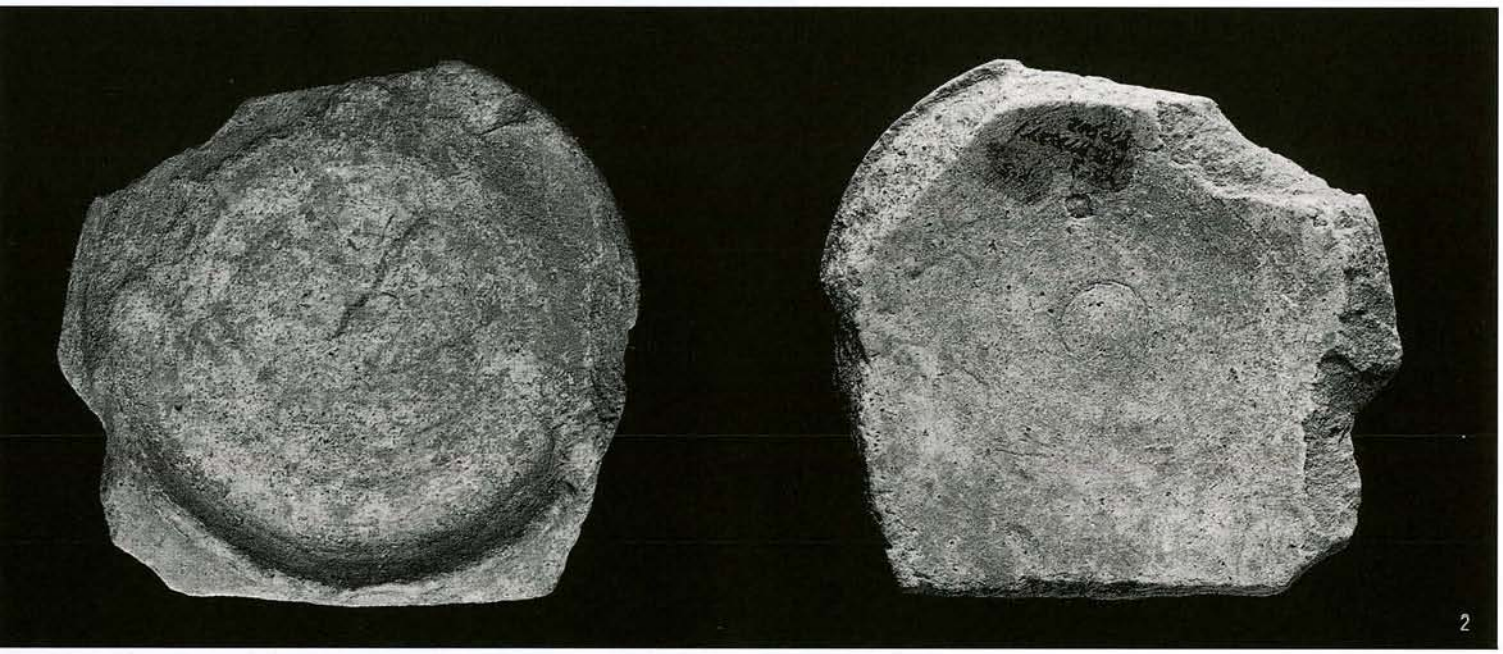
上：C区全景（南より）
中　：同　　上（東より）
下右：ＳＢ16柱穴断面（西より）
下左：ＳＢ15・17柱穴断面（南東より）

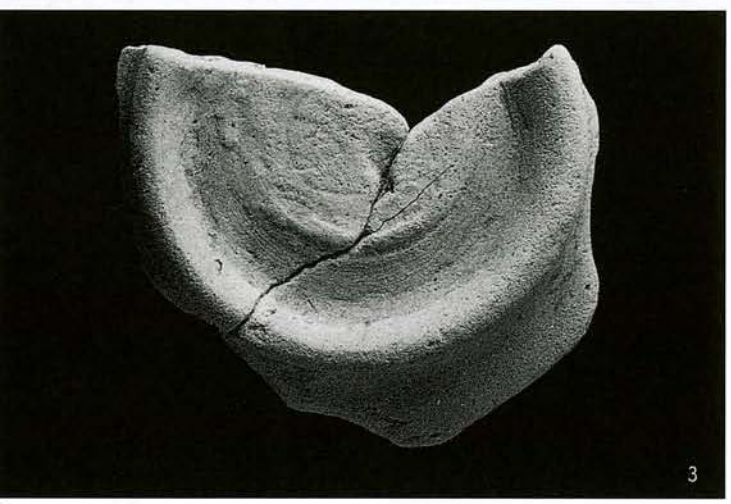












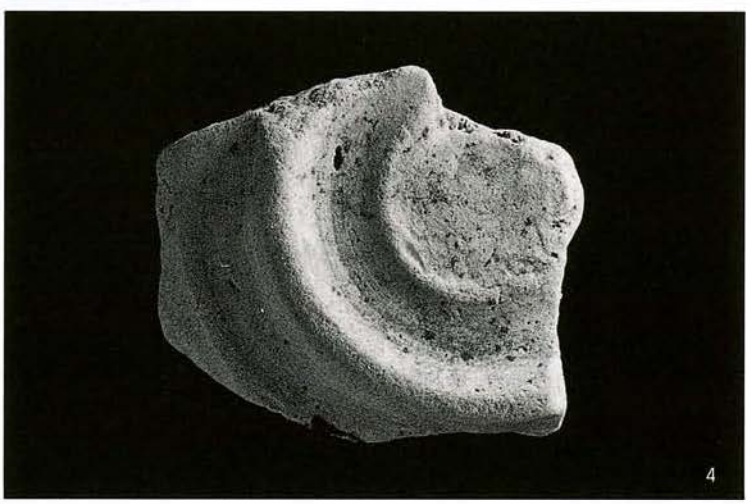
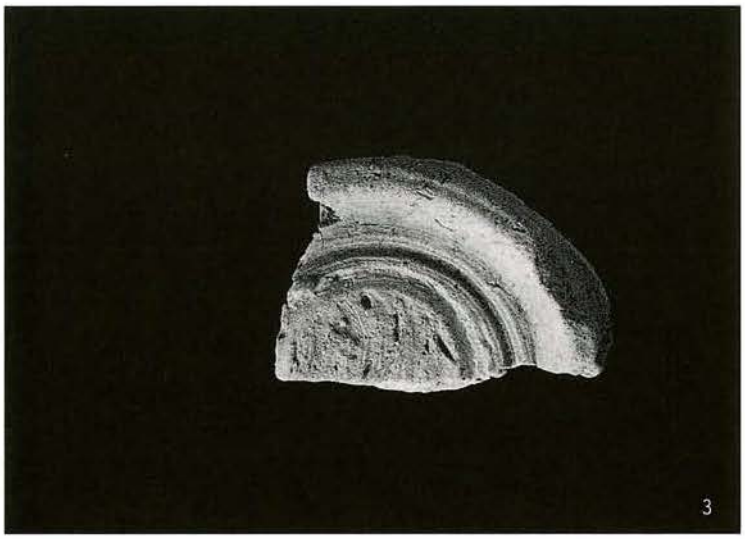
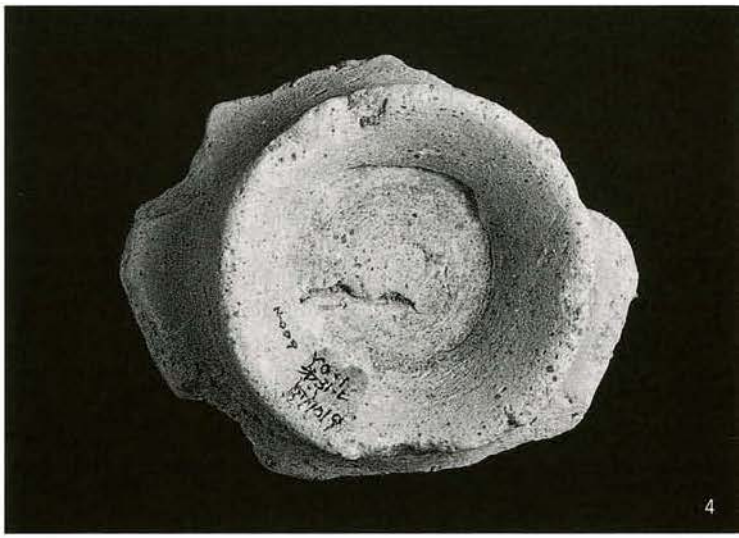
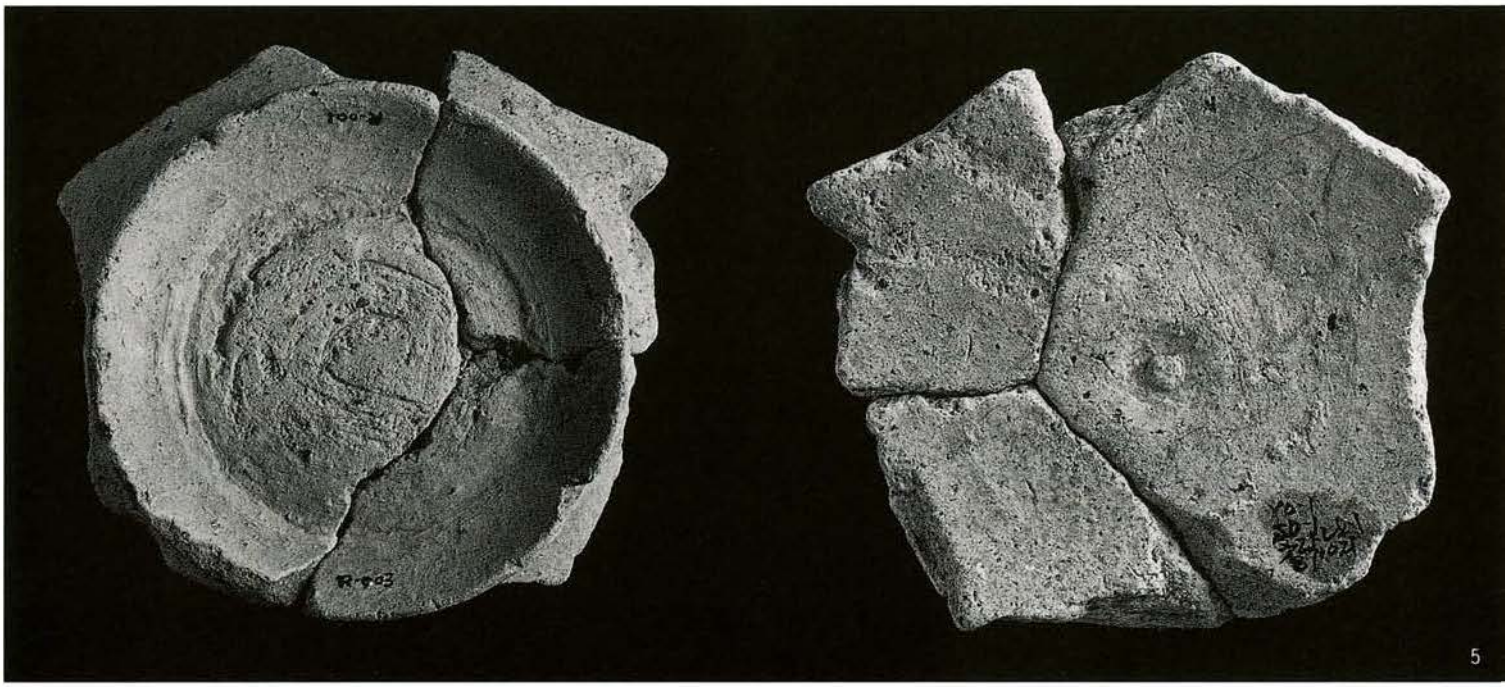


図 版 4

1 第12図 1
2 第12図 7
3 第12図 6
4 第12図 5







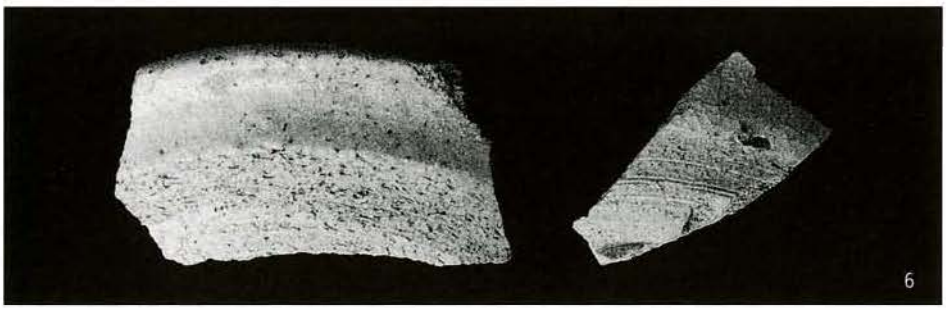


図 版 5

1 第13図10
2 第12図10
3 第12図8
4 第13図8
5 第13図5
6 左：第12図13
右：ＳＢ15を切る小ピット

報告書抄録

ふりがな	やわたおきいせき
書名	八幡沖遺跡
副書名	第3次調査報告書
巻次	
シリーズ名	多賀城市文化財調査報告書
シリーズ番号	第47集
編著者名	千葉孝弥・山川純一
編集機関	多賀城市埋蔵文化財調査センター
所在地	〒985　宮城県多賀城市中央二丁目27番1号　TEL022—368—0134
発行年月日	西暦1997年12月31日

所収遺跡(ふりがな)	所在地(ふりがな)	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m²	調査原因
八幡沖遺跡(やわたおきいせき)	宮城県多賀城市宮内一丁目152—1(みやぎけんたがじょうしみやうちいっちょうめ)	042099	18007	38度16分41秒	141度00分51秒	19970825～0912	433	開発行為に係る確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
八幡沖遺跡		平安	掘立柱建物 溝	赤焼き土器	多賀城市の海岸部において10世紀前葉以降の掘立柱建物を発見

多賀城市文化財調査報告書第47集

八幡沖遺跡

—第3次調査報告書—

平成9年12月19日　発行

編集　多賀城市埋蔵文化財調査センター
多賀城市中央二丁目27番1号
電話（022）368—0134

発行　多賀城市教育委員会
多賀城市中央二丁目1番1号
電話（022）368—1141

印刷　今野印刷株式会社
仙台市若林区六丁の目西町4番5号
電話（022）288—6123